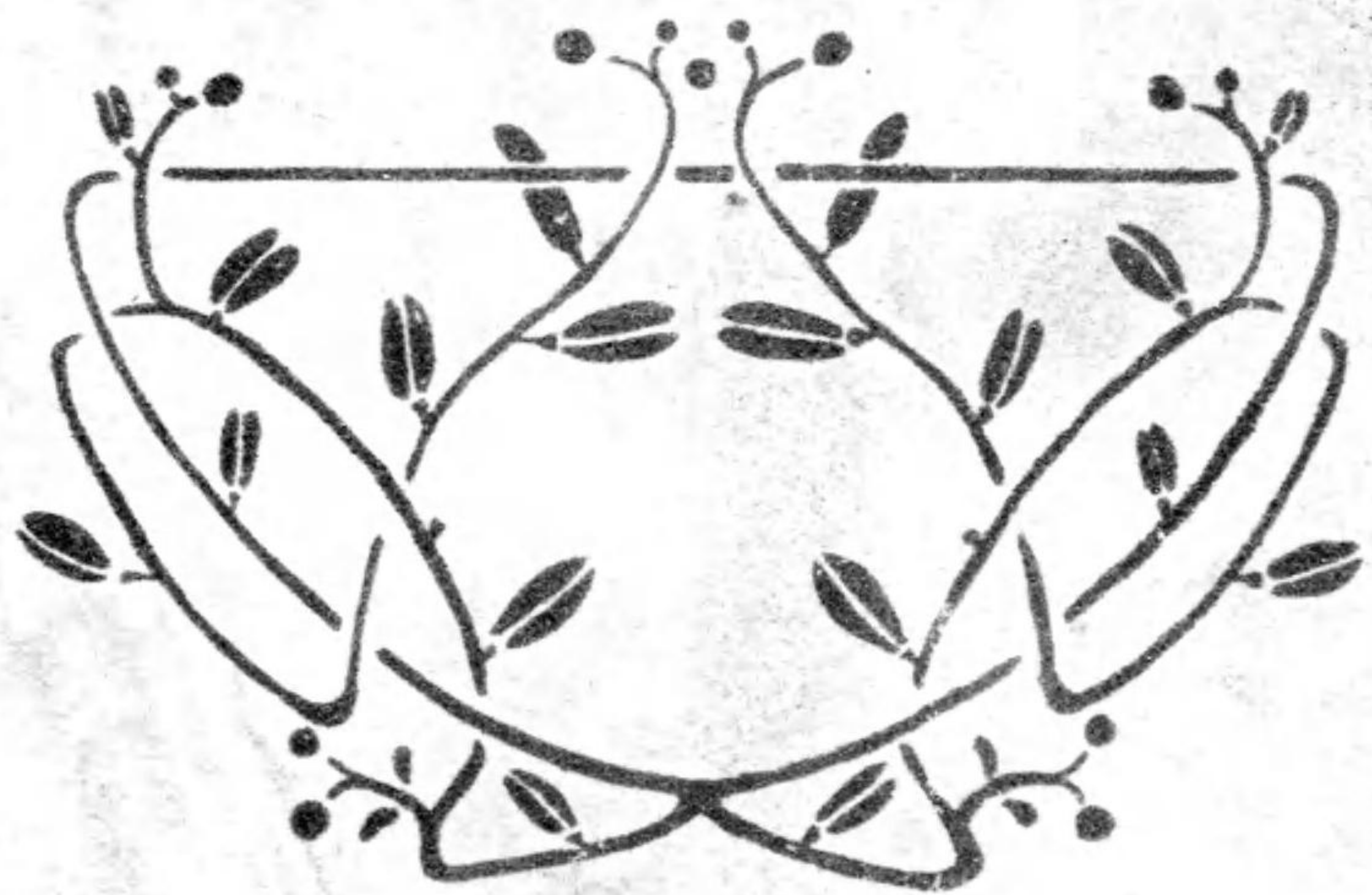


特102

123

蔓 草

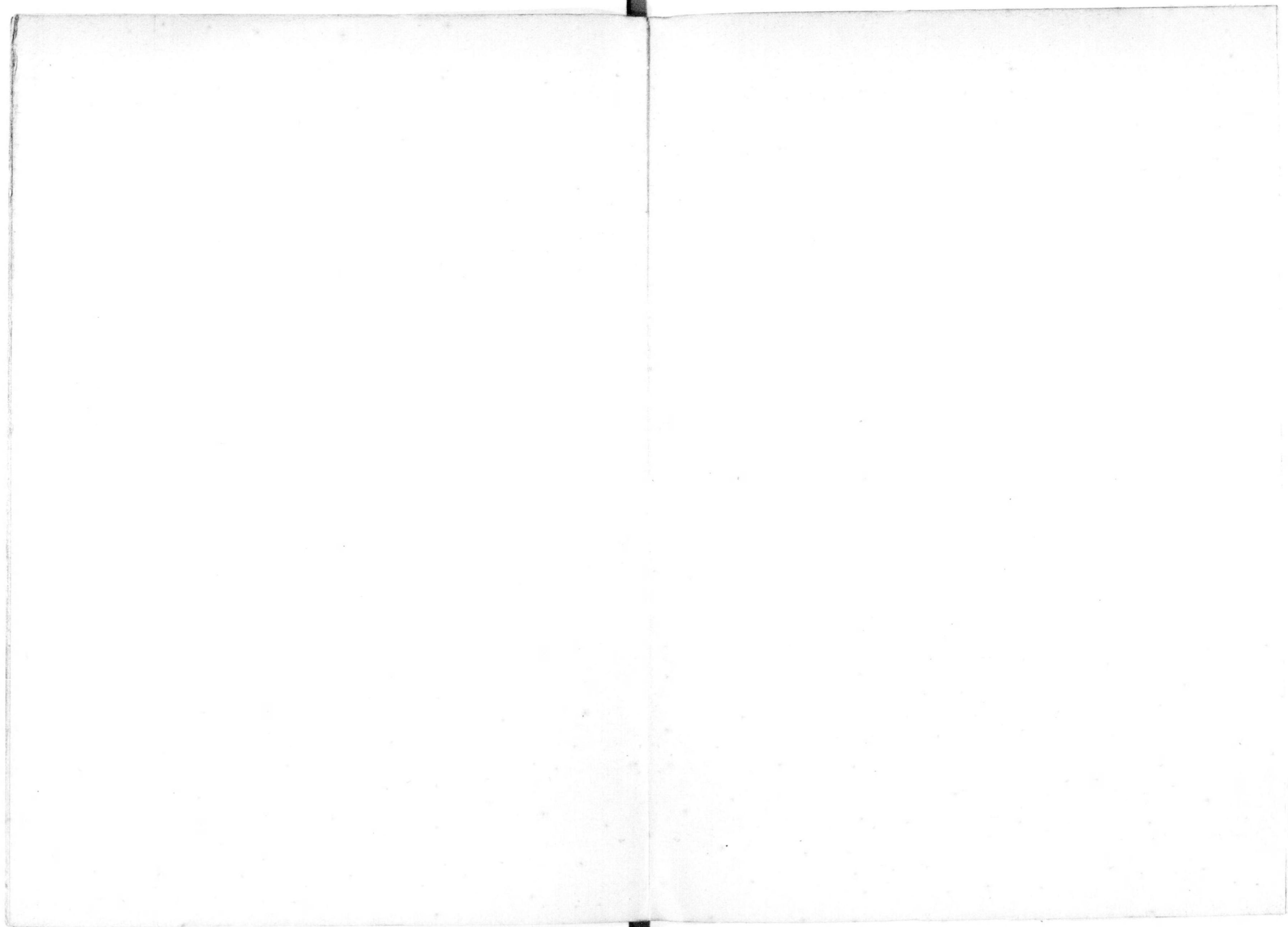


小 林 薜 花 著



始





特102
123

あ、友よ旅に出で、は君を戀ふさ書きてみつ
めて物思ふかな

佐
治
祐
吉



この集をよむ人に

藁草といつても色々ありますが、私のこの藁草は或特定のものぢやなくつて、只かよわき藁草といふその感じです。

日光も青くしみ入る。緑濃き森の林の間に葡ひ纏はれる名もなき草のさびしさと思つて、頂いてもよろこびます。

黒い柔らかい土の濕味もつさりとなつかしい、あの野榮畑の藁草の伸びては遂にわかれ行くその莖の悲しさも考へて下さつてもよろこびます。

さては又庭園の夕ぐれを、蟲の音のすゝりなく所にひきからまつて、ほつちりと白い花など闇の色に浮べてゐるその藁草を感じて頂いてもよろこびます。又僅かの風にも揺れ動く藁草のやうに、感じ易く傷み多い私の胸に捧はれたら

のご察して下さつてもよいのです。

私の作歌は明治三十八年から始まつて、四十五年まで八ヶ年になります。その間の歌は皆で五百首ばかりありました。私は今その中から比較的眞率なものを茲に抜きました。

この集を作るに際し、庄田忠保君の表紙畫をお寄せ下された事の特記し感謝の意を表しておく次第です。

大正九年秋十月

コスモス乱る、窓にて

作者より

蔓草

小林薺花著

蔓草のかよわき花にまつはりてわが悲し
みの夕となりぬ

明治四十三年

蕎麥の花夕闇に浮くほの白さそのさみし
さにわが秋はゆく

蟲が啼く、おれ蟲が啼く、さみしかる、女よ汝
も離れてあれば

コスモスの夕風にゆるうす赤き光りに慄
ふ秋のかなしみ

狂はねばわれに眞心なかりしか失ひし戀
を冷やゝかに見る

ふと友の面影なども浮べつゝ涙かなしき
月白き秋

螢、螢、さみしや汝はこの闇に燐の光を漂は
すかも

失ひし戀の手傷も秋風もわれ狂はせずあ
ぢきなきかな

紫のあまきにはひを漂はし桐の花散り夏
となりけり

乳色の濁れる空に新緑の木の葉が光るう
すら悲しさ

野茨の花瓣かめばうす甘し君の上なごふ
と思ひつゝ

石うはて卻ひゞきて黄色なる松の花散る
夏の山かな

句ほやかに明るき色に吸はれ行く朝の山
の山鳩の聲

明治四十五年

ほろくゝと晝の蟲なく戸によりて遠き山
など眺めてあれば

旅人どわが名呼ばれて雲多き秋を泣きに
もいでまほしけれ

かの唇の思ひ出のみが残るらしわかれし
秋のさみしきかなや

あてもなく白き真砂をふみて行く真晝は
光る千葉の海かな

利根川の濁れる水を眺めつゝ今日も寂し
き旅行の道く

すみだ川濁れる水を見入りたる若き男ありき
忘れ難き

はたたりよその咽ぶ音のやるせなさ遠人
たもふわが夜の床

雨ばれの濡れし木肌の濕るほひに青める
月の照らす夕ぐれ

冬枯れの森の木の間には啄木鳥のさびしや
ひこり餌を求め居り

一二寸青み帯びたる麥の芽に雨後の光の
あまき接吻

青草のかほり冷たく鼻をうつ思へばわれ
は夏の野にあり

丘に來て青草に臥て今日もまたはかき
事を思ひつゞけし

青草のかほりの中に身を浸し泣きてかへ
れば心和みぬ

馬鈴薯はうす紫の花つけぬこの頃われは
物思ふこと多し

夕ぐれは咽ぶが如く蛙なく女よさびし
われは涙す

觸るゝとき白きみん齒に當りにきその唇
のこひしかりけり

わかれ來て把りし女の手の温味思ひなが
らも日記にきを書くかな

別れ來て悲しき事を思ひつゝ仰ぎし空の
青くありけり

林檎なごガラスの皿に盛られたり君も黙
せりわれも黙せり

うつむきてやゝ顔赤め黙しつゝわが言を
きく女なりしか

胸にひめし思を言へずわかれ來てさびし
き室に蟲の聲きく

紫の襟を好みてつけたりし女なりきと思
ふも悲し

こゝろよく秋の光は溢れたる明るき室に
女と語る

雨に落つる葉の花なご足駄もて踏みつゝ
君を待てるあひつき

うづくまり悲しき事を思ひ居ぬたそがれ
せまる野のくぼ地かな

圓卓の青磁に盛れる葡萄など朝の光に照
らさるゝ秋

淺茅生の小野の秋草色づける秋深き野に
泣きにゆくわれ

わが窓の灯影さみしう流れたり虫の音し
げき叢の上に

われ病みてほごゝ死なむその宵の君が
素振りと思ひやるかな

サラ／＼と走らすペンをふとやめてこほ
ろぎの音に耳傾くる

和らかき女の小さま手の上に輝く春の灯
の美しさ

多く思ひ多く悲しむわが性をつたへし父
母をむしろ讃へむ

なつかしく涙溢るゝ落葉の本立の中に夕
日を見入る

つみどりて君と並びて語り行く野菊の花
に悲しみの葡ふ

衰へし午後の光に影うつす土藏のわきの
コスモスの花

黄色にも淀める秋の日光にやるせなき身を
枯草に臥す

數本の赤き花もつサフランにしみぐ秋
の朝の光りす

樹々のひまいとしめやかに夜氣の蒔ふか
はたれ時をひとり歩めり

停車場の貯炭所のわきいさゝかの空地に
さきしコスモスの花

黄に濁る秋の入日のうそ寒きかはたれ時
にさびしみをもつ

秋の夜の雨に流るゝ燈影に秋海棠の赤く
匂へる

雪白き國の境の山脈に吸はるゝ月の色の
悲しさ

茫然とランプの灯など見てありぬよりご
ころなきこのさびしさに

紫の花など咲ける丘の上や夕日かぎろひ
うす明すも

月させば漂ふ草のあまき香の五月の野邊
にみち溢れたり

立ち並ぶ檜の林を出でし時見ねにし沼を
つくづくと見る

明治四十三年

黙したるみ空の如き水色の悲しみといへ
このわがこころ

うすぐらき落葉の窓のたそがれや黙して
ひとり眼をこぢてあり

月光は白う流れぬ丘の上露もつ小さき秋
の花ごも

放たれて冷たき土にかへり来る落葉に似
たる淡きかなしみ

鳥二つとある林にともぐに一日なきぬ
やがてわかれぬ

いとせめてこの心をば残りなく言はむと
せしも何ほどのこと

潮満ちぬ月明りする磯山の一角に立ち海
を眺むる

上りゆく峠の路のいよゝゝに廣くも見ゆ
る春の海かな

無言にて君と對する静けさのその一時の
さびしき思

われ死せば草のみ墓を蔽ふらむあゝわが
友よ切にさびしき

わが墓に櫻植ゑなむ春の夜に朧ろに朧ろ
がなつかしき故

明治四十二年

雪は降る永劫に絶わぬ大地の寂しさを
覆ふとあゝ雪はふる

倦んじては何を求むるわがこゝろ小窓ゆ
遠く冬の山見る

黄色なる秋の光に野も山も塔も木立も黙
して立ちぬ

ほゞけ穂芒みだれぞよめく風の野の夜霧
の中に月の出でたる

秋の野やわかれし君はうなだれてさびし
く行けごかへり見もせず

さびしくて涙あふゝある宵はなごさは弱
きと勵ましつゝも

枯草に頭うづめてわれひとり泣きしと見
たる秋の夢はも

夢の國夢の野にして夢の花つまむと願ふ
われ人なれや

雨やみて濡める如き夕月は卑す小野の木
立の上に

蒼白き月の光にみどり葉の葉裏さびしき
わが思かな

離れ磯にひとりし立ちぬ夕されば片寄る
波の悲しきを見て

月光の冷たき影に磯波は水漬く蘆根によ
すがらよせぬ

落日や砂いさごの上に軀を伏せてあざとふ浪の
赤きをめでぬ

かへりみれば君が姿は野の末に小さうゑ
りぬ夕のわかれ

夕陽ゆふひあびて歸り行きます君が影をさびし
とわれは佇みて見る

わかれてはふりかへりつゝ願みぬ雲湧く
日なり丘越への路

沙羅の木の茂る林の遠方に月澄み昇るみ
佛の國

ある夜われ世にたゞ一人と思ふとき寂し
うなりて涙ながれぬ

並び立つ二つの大樹風の日に吼び狂ふを
きゝてゐる窓

海といへば緑にごよむ初夏の潮のかほり
ぞ切に戀しき

鞆と岸打つ浪の音きけば若き心は甦りぬれ

北國や磯曲かに焚ける漁火は消ねんとすなり有明月夜

信天翁群れ居る磯の南の島こそ思へ初夏の雲

月させば大き小さき色々のかげなつかしき春の夜の森

萩こねて遠く流るゝ野の水に夕日の光しばし漂ふ

白波は狂ふが如く寄せ來るを松並越しに見る君が家

明治四十一年

青じめる月の光りにかすけくもわが行く
道を見出せし夢

思出は冬枯れの野の大銀杏別れによりし
ろのかみの日や

木立みな身慄ひなすよ一しきり榛の林に
風渡るとき

驛路はつみちの柳の並木ほろくそ落葉こぼれて
秋の日は落つ

干柿を數多つるせる家によりて路なご問
ひぬ雲飛ぶ夕

黄や紅や色さまざまの菊畑に低う露する
ふるさとの秋

秋の丘榎の幹に身を凭せ流るゝ白き雲數
へ見る

こほろぎや祖父とまる寢にさまざまの物
話きゝにし昔こそ思へ

秋風は思ひ運びぬ水やせて砂原白きふる
さとの家

さびしさに夕べ戸に寄り露たもき萩吹く
風をなつかしむかな

更くる夜を油添へては語るかなわがなつかしき叔母が家にして

と思ひぬ月は朧ろに夜は更けて蟲なく夜半よわが夢に似る

消ねて行く雲にも似たるさびしさの常住たねぬわが胸の野や

辛夷シヨヒ花ハナさく小さき島あり北海の怒濤さかまき獵リョウ多タきところ

大徳ダイトクの法のみ講のいま果てゝ老幼かへる菜の花の路

喘ハクへぎつゝ登る白衣の行者等に青嵐ふく飯イヒ豊トヨの山ヤマ（飯豊に上りて）

並び立つ大木老樹に夕日して怪鳥なきよる谷のほそ道

春の夜や王土の果の遠島に棕櫚の月見る土蠻を思ふ

はつ秋やさやかに晴れし山々の尾より峰
より白雲湧きぬ

秋姫がふと誤りて落したる紅とも見ゆれ
秋海棠は

老いませる祖父が昔の物語り秋の夜なれ
ば蟲も啼きけり

西百里いかに君を戀ひわびぬ磯の夕を
木枯する日

草に臥て野の花つみて牧の子とまろびて
語るふるさとの夏

明治三十九年

ほのぼのと窓ぞ明けゆく窓ぎはの

光りに漂ふ淡きかなしみ

葛岡常次作

大正元年十月廿七日印刷
大正元年十一月三日發行

著者兼
發行者

福島縣河沼郡日橋村大字八田甲二六二
小林源

吾

印刷者

福島縣若松市上一ノ町
佐藤八四郎

印刷所

福島縣若松市上一ノ町
丸八活版所

發賣店

若松市下一ノ町

鈴木

屋書店

電話一二〇番

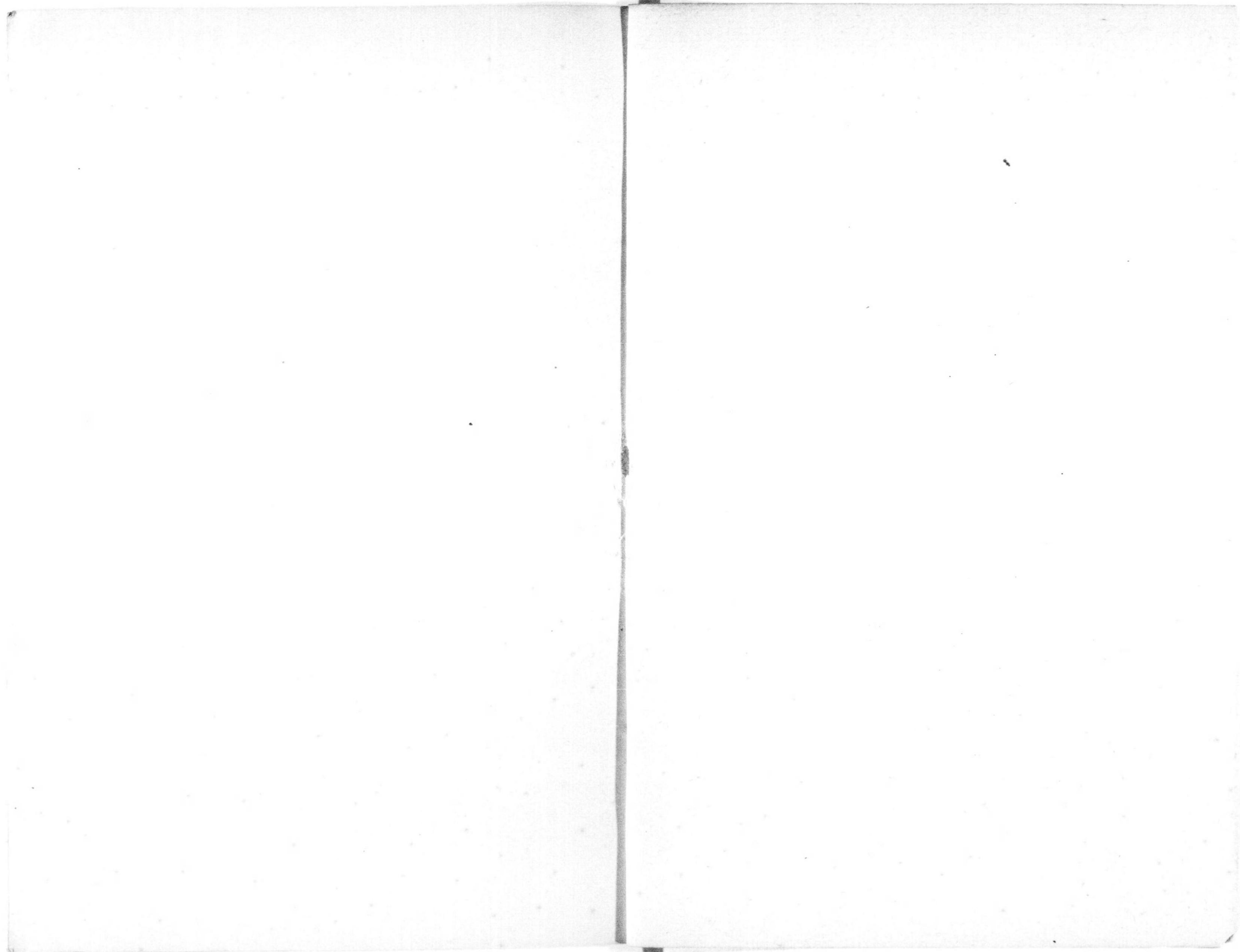
喜多方町

瀨野

屋書店

電話一〇二番

定價金拾貳錢
郵税金貳錢



272
18

終

